





興味あり

問い合わせ



関 愛子 Aiko SEKI

— 2017年、岐阜にてサステナブルアートジャパンを設立

— 2018年、アーティストとして活動開始

創作のモチーフのみならず制作過程における現代社会が直面する地球規模の環境課題へアプローチする手法を模索する。

はじめに。

アートは、お金がかかる——

そんな通説で、創作を諦めるのは、子どもたちだけではありません。

東日本大震災の翌年、私は、旧知のアーティストから、経済力の不足を理由に筆を折ると告げられました。彼の才能が開花しはじめ、全国的にファンが付き始めていた矢先のことでした。

そのことを聞いて、いくつかの疑問が私の頭によぎりました。

文化も技術も豊かな時代、いまや、だれもが自由を謳歌できる世の中であって、プロになる前の、才能ある者が、その才能をさらに磨いていける場所は、いったい、どれほどあるのだろうか？

学校？ 教室？ お金を払って、教わりにいくしかない？ 彼の才能を惜しみ、彼のように、場所があれば、材料があれば、—— 教える人がいなくても —— 創作活動を続けることができる・・・

そんなひとたちを支える仕組みとは、果たしてどんな形なのだろうか？

そう模索しはじめたことが、私が提唱する「サステナブルアートジャパン」の原点です。

画材やスペースの調達には、「お金がかかる」

- ： 時間的余裕がなく、つくることが後回しになっている人。
- ： 体力的余裕がなく、創作への意欲も失いかけている人。
- ： 空間的余裕がなく、画材はあるけど、なかなか聞く機会のない人。

興味あり

問い合わせ



そんな人たちがいる一方で、  
画材を手放す人たちがいます。

生活空間の質の向上を求め、コロナ禍でも「断捨離ブーム」が再燃しました。環境問題を目の前にして、“捨てない（リデュース）” “再利用する（リユース）”などの手法が推奨されていたとしても、まだ使えるものが、日々、不用品として大量に捨てられているのが、現代日本の等身大の姿のように思われます。

裏を返せば、それは、現代日本の生活環境下において生活の向上が喫緊の課題である、と認識されている、という風にも捉えられるでしょう。

この二つの状況は、同じ地域内で起こりうること。

そこで、あぶれた画材や素材を、再利用・再活用（リユース）循環させることで、求めあうムーブメントを有機的につなぐことができるのではないかな。

それはまた、創作をつづけたい人たちにとっての金銭的不安を、多少なり払拭する解決策として有効に機能するのではないかな？

そんな確信にも似た仮定を掲げ、2017年、地域で不要になった画材を集め、貸し出す仕組みの具現化に、取り組みはじめました。

その代表的な試みとして、地域で不要になった画材を集め、描きたいひとへ提供する『リユース画材貸出プロジェクト』（持続可能性の希求）、創作を通じて自我を解放したいと考えるひとへ向け、絶景ロケーションでの制作を提案する『景勝地アトリエ化計画』（芸術活動を通じた多様性の追求）などがあります。

——”もったいない”を変えていく ——

たとえば、それを資源に。

たとえば、その認識を。

たとえば、その意味すらも。

——つづけたいひとへ、ずっとつづけられる環境を。

日常に慣らされ見過ごされがちな、地球規模の社会問題。しかし、誰もが無関係ではられない課題へ、地域にしながら、個人ができるレベルでアプローチできることは、まだあります。

サステナブルアートジャパンでは、

「地域に還元・未来に貢献」を第一義として、

『"もったいない"を変えていく』活動を推進しています。

興味あり

問い合わせ

\*ワークショップ企画等の販売価格については、まずはチャットから、お問い合わせください。

▼「サステナブルアートジャパン by ぎふのふ」

▶▶[ワークショップアーカイブ2018](#)

▼アーティスト活動

▶▶[アーカイブサイト2020](#)

\*地元のライターさんによる取材記事（2019）：

[眠らせていた力を解き放って、やりたいことを形に。岐阜から「サステナブルアート」の輪を広げる関愛子さん](#)

関連URL（SNSなど）

[サステナブルアートジャパン by ぎふのふ](#)

興味あり

問い合わせ